



TITLE:

星雲

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 星雲. ことばの構造とことばの論理: 山口巖教授停年記念論文集 1998: 755-720

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65783>

RIGHT:

「京大教養部報」No. 17 昭和43(1968)年4月10日。コラム「星雲」。

星雲

明治百年ということばが最近頻りに語られる。その政治的背景は別として年号については想い出すことがある。以前数人の人々と雑談を交わしていた時である。一人が日本の年号を問題にしてこれがいかに不合理きわまる代物であり、いかに西洋の暦法がすぐれているかを力説した。すると偶々同席していた英国人が西暦などは馬鹿のすることで、年号のある方がよっぽどすぐれていると言下に答えた。考えてみれば西暦は成程合理的ではあるが、それだけに理に落ちるうらみが残る。時代との関連が直観的につかめないからである。逆に元禄とか享保とかいえば客観的年代ははっきりしなくても、すぐさまその時代のイメージが浮び上がる。両者はそれぞれに長所と短所をもっているのである。

明治以来日本の学問は三つの世代に分たれるという説がある。第一の世代は外国の学問の紹介にとどまったが、次の世代はこれを基に多少強引であっても独自の体系を創り上げた。第三の世代はこの体系を発展させ、その歪みを克服するところにそのレゾン・デートルがある、というのである。これは穿ちすぎた観方かも知れないが、暦法の話のように、舶来の学問をしていると、とにかくそれが絶対のものであるかのように想われて来るものである。しかしそれではいつまでたっても欧米の後塵を拝するばかりで寄与するところは少ないであろう。だが現実には外国の業績の紹介を事とする「明治型」の学問が後を断たぬのも事実である。我々もそろそろ「明治」から脱却することを考えねばなるまい。

「無用の用」ということがある。対象をさまざまな観点から引き較べ、長所をとり短所を補ないつつ新たな道を拓くためには、広い視野が必要であり、一見無駄にみえることでも必ず役に立つものである。一般教育はこのためにこそある。せつかくの教養課程を過しながら専ら単位取得の難易や有効性だけから講義を選択することが仮にあるとするならば、将来のために誠に由々しいことといわねばなるまい。よろしく百年の計を立つべきである。

山口 露語